

2022年5月1日(日) 5課 使徒言行録 18章 1～11節

週題: 「アテネでのパウロ」

暗唱聖句: わたしがあなたと共にいる。・・・この町には、わたしの民が大勢いるからだ。

使徒言行録 18章 10節

18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。

18:2 ここで、ポントス州出身のアキラというユダヤ人とその妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、

18:3 職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。

18:4 パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めていた。

18:5 シラスとテモテがマケドニア州からやって来ると、パウロは御言葉を語ることに専念し、ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証しした。

18:6 しかし、彼らが反抗し、口汚くののしったので、パウロは服の塵を振り払って言った。「あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかけ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。」

18:7 パウロはそこを去り、神をあがめるティティオ・ユストという人の家に移った。彼の家は会堂の隣にあった。

18:8 会堂長のクリスポは、一家をあげて主を信じるようになった。また、コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた。

18:9 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。」

18:10 わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」

18:11 パウロは一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた。

● ショートメッセージ

(文責・H.G)

今週の聖書教育誌の週題は「恐れるな、語り続けよ」です。

**「マタイ 28:19 あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。」**

このイエス様の大宣教命令で語られた言葉は実はすべてのユダヤ人だけに向けられたものと弟子たちは当初考えていたようです。しかし、ペトロを通して異邦人にもイエス様の福音が届けられました。

ここで、ユダヤ教から改宗したユダヤ人キリスト者が異邦人キリスト者に対してモーセの慣習に従い割礼を受けなければ救われないと主張して対立が生じました。このためエルサレムで使徒会議を開きペトロのこの言葉で異邦人伝道の道が開かれました。このことはユダヤ教という民族宗教からすべての民を救うキリスト教へと変えられていく転換点ともなったのです。

**「使徒言行録 15:8～9 人の心をお見通しになる神は、わたしたちに与えてくださったように異邦人にも聖霊を与えて、彼らをも受け入れられたことを証明なさったのです。また、彼らの心を信仰によって清め、わたしたちと彼らとの間に何の差別をもなさいませんでした。」**

この決定によりパウロはシラスとテモテを伴って第二回伝道旅行をシリアのアンティオキアから出発しました。途中のアジア州では福音を語ることを聖霊により禁じられたので、トロアスから船出してマケドニアのフィリピ、テサロニケ、ペレアで福音を伝え、さらにパウロは単身でアテネとコリントへ向かいました。この間、福音の恵みの実りも多くありましたが、キリストを宣べ伝えるパウロたちに対して反抗するユダヤ人も多く、さらにアテネ滞在中には病気に襲われて思うようには活動出来ないほどでした。

アテネには反抗するユダヤ人から逃れるためもありましたが、着いてみると至る所に偶像があることに憤慨したパウロは毎日、アテネの人々と論じ合いをしたことを先週学びました。それでも何人かの改宗者が与えられたことは恵みでした。しかし、体力的、精神的に疲れ果てたパウロはアテネを離れてコリントへと向かうことになりました。

**「一コリント 2:3 そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。」**

コリントはアカイア州の首都であり商業都市として当時はアテネ以上に栄えていた都市でした。パウロは体の休養回復に努めることもあってのことでしょうが一年半にわたり滞在して伝道し、教会を建てるのが出来たのです。ここでパウロは終生の信仰の友に出会います。同じ天幕作りの職業を持つローマから来たアキラとプリスキアの夫婦です。疲れていたパウロは彼らの家に世話になりながら同じ仕事を続けることが出来ました。私たちが教会での兄弟姉妹は真の信仰の友です。教会での交わりは疲れた魂を回復させていただき、み言葉の力を受けて信仰の証し人へと成長させていただける幸いを得ることが出来るのです。パウロも彼らと出会ったことが異邦人伝道の大きな励ましとなりました。「出会いは人生を変える」のです。常盤台教会に 10 年前に長崎から赴任して下さった友納牧師の最初の宣教題は「出会いは人生を変える」でした。

しかし、福音の前進の前には反抗や妨害が付きまといまいます。この時のパウロの伝道活動の反抗者は宣教に務めたユダヤ人の中の人たちでした。それで彼は心を決めてこう言ったのです。

**18:6 パウロは服の塵を振り払って言った。「あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかかれ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。」**

パウロはユダヤ人の群れとは縁を切って新たな伝道活動に励んでいきます。「18:7~8 パウロはそこを去り、神をあがめるティティオ・ユストという人の家に移った。彼の家は会堂の隣にあった。会堂長のクリスポは、一家をあげて主を信じるようになった。また、コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた。」

と、聖書にあるように多くのギリシヤ人が信仰を持つようになり、隣りにあったユダヤ教の会堂長のクリスポの家族一同さえも主イエスさまを信じるようになったことはパウロにとっても大きな恵みの出来事であったことでしょう。

**18:9~10 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」**

意を決して異邦人伝道に行くといったパウロでしたが主が「**恐れるな**」と主が語りかけて励まされたのは決して意気軒高であったわけではなく、むしろ挫けそうになっていたのかもしれない。「**わたしがあなたと共にいる**」と徹底的に支えると主は言われたのです。なぜなら、「**わたしの民が大勢いるからだ**。」なのだからです。こうして、パウロは勇気づけられてコリントの教会はパウロが建て上げた教会の中でも最も大きな教会となることができました。パウロの目には大勢の民が見えていたのでしょうか

か。そうではないと思いました。けれども、主がそう言われるのであれば主の民が大勢いるのです。そのためには福音を語り続けなければならないことを自覚したパウロは覚悟をもって、このみ言葉に立ったのです。

**「一コリント 1:18 十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」**

私たちの住む東京もコリントのようだと思います。異教の地であり、頹廢的な要素も多く含む町です。けれども、その町には私の民が大勢いると、今も主は私たちに言われていると私は思います。コロナ禍で教会を尋ねてくださる方が増えています。み言葉が届けられるのを待っている方がおられます。「**恐れるな**」「**わたしがあなたと共にいる**」と今も主は言われて私たちを励まし続けておられます。もし、コリントの伝道が失敗していたら今日のキリスト教は無かったかもしれません。私たちの国、日本の伝道は道半ばです。コリントのように東京の地にリバイバルが起こったとしてらどうでしょうか。主は私たちが恐れず立ち向かうための同労の友を必ずや与えてくださいます。パウロも一人だけでは成し得なかったことも同労者に支えられて前進しました。

「**わたしの民が大勢いるからだ。**」このみ言葉を私たちの常盤台教会も常に胸に刻んで歩んでいきたいと強く思われました。

#### ● 分かち合い

・誰にでも思ったことが実現できず、肉体的にも精神的にも疲れ果ててしまうことがあります。失敗しない人はいません。その経験から示されたことを思い起こしてみましよう。

・励まされたときに、ただ言葉だけでなく寄り添ってくださる方がおられることが私たちの力の源です。その体験を分かち合ってみましよう。

#### ● 次週の予告

「それでもエルサレムへ」と題して使徒言行録 20 章 17～38 節から読みます。

今週の「聖書日課と分かち合い」で、日々み言葉をいただきましよう。